

フランスの哲学教員へのインタビュー

実施日時：2022年2月2日17時～19時（ECT）（オンライン）

インタビュイー：Sébastien Lévy 氏（Cité scolaire Claude Lebois）

質問&回答

1. 経歴

・学歴

ボルドー第三大学（現・ボルドー・モンテーニュ大学）哲学科学士課程（3年）、修士課程（2年）（修論は様相論理に関するもの）、教員資格準備課程（パリ・ナンテール大学、合格率が高く、口頭試問の練習が毎週あるなどプログラムが充実していた）

・職歴

2018年中等教育教員資格（CAPES）取得6時間の dissertation²つ、模擬授業5時間の準備、上級教員資格 Agrégation の場合は外国語文献の講義があるが CAPES にはないのが大きな違い

その前年より非常勤教員として哲学を教える（文科系6クラス担当、1クラスあたり25～35名）

CAPES 取得後1年間の研修（授業担当50%と研修50%）を経て正式採用

2. 高校の哲学教育

2.1 高校三年生の哲学

・新プログラムについて

中国哲学、インド哲学が入ったのは非常によかった（日本哲学がないのは残念）

一年間に一冊著者リストから選んだ著作を読む（1年目メルロ＝ポンティ『目と精神』、2年目フーコー『知への意志』、3年目『共産党宣言』）→教員によって選択は違うが、主に追試（口述試験）に向けた準備としてこうした著作は使われる（授業で読んだ本についての質問をすることで、ゲタをはかせやすくする）

・初中等教育の総括としての位置づけはどれほど意識されているのか

クーザン以来の哲学教育の歴史を振り返ると、ディセルタシオンを通しての思考力の育成という意味で哲学は重要。かつては高校の歴史科目でもディセルタシオンを課していたが、今や唯一のディセルタシオンが哲学。かつてはエリートのみを対象としていたバカ

ロレアだが、教育の大衆化とともに、初中等教育の締めくくりとしての哲学のディセルタシオンという位置づけには困難が。

- ・高校2, 3年生の「人文学、文学、哲学 (HLP)」

哲学の履修が高校2, 3年生に広がるのはよいこと。カリキュラム上の制約が少なく教員も好きなことができる。HLP ではディセルタシオンはない。3年生になり哲学を履修しだすとバカロレアを目標としての指導になり、教える内容や方法の制約がより厳しい。

3年生の最初は *problématisation* の方法を徹底的に教える。

今の勤務校では1コマ1時間の授業 (週4コマ)

内容に関しては、複数の概念や手がかりを横断するような問題を設定し、一つの課にする。年に4課 (レヴィ先生の場合)。例「すべてを疑うことはできるか」「異なる世界は可能か」「言語はすべてを説明することができるか」など。

教員は「○○の学説」のような教え方をするのではなくて、常に問題と関連付ける形でさまざまな立場を紹介し、議論の仕方を教えなければならない。

方法論、内容の授業、宿題の添削などやることは非常に多い

宿題は8回 (小バカロレア) 出すことが国民教育省から推奨。最低3回の授業内課題が必須。4時間の課題の時間を捻出することは難しい。

- ・クラスサイズ (25~35名)、担当クラス数2 (パートタイムの場合、今年度のレヴィ先生) 4~6 (フルタイム)

- ・生徒の反応 (答案のレベル、将来志望する進路による違いはあるか?)

最初は皆非常に好奇心旺盛、初めて習う科目なので。

最近の生徒：たとえば「意見」と「真理」の違いを理解させることが難しい

哲学を嫌う、拒否する生徒もいる。他の科目でできがよい生徒がそうなることもある。背後に保護者がいるので対応に気を遣う

- ・バカロレア改革によって、哲学の総合評価における重要性が下がった (特に文科系に属していたであろう生徒にとって)「学問の女王」としての地位を失いつつある?ただし、数学の選択者激減のようなことにはなっていない。HLP は比較的人気がある (文学と哲学の教員で担当)。3年の哲学に比べて自由が大きい。3年になったときに生徒にとって悪い驚きがある。

- ・旧カリキュラムでは文科系8時間経済社会系4時間、理科系3時間 (週)。理科系はカリキュラム内容がそこまで少ないわけではないので、消化が大変だった。

- ・高校には2000人の生徒が在籍 (そのうち3分の1が3年生) 哲学教員が6名。

- ・登校拒否の生徒やその他配慮を必要とする生徒については別個の対応が必要。個別授業など。

- ・COVID-19の影響

クラスサイズを半分にして週ごとに交互登校

対面と配信を別々に実施 (2倍の負担)

今年是对面で実施（リセによって対応は異なる）

今年のバカロレアが4題だったのは COVID-19 の影響（プログラムを終了できなかった学校に配慮）

3. バカロレア

- ・ 召集されるので拒否できない。2人で採点して、点数が離れている場合は協議
- ・ 1枚5ユーロ
- ・ 採点期間が年々短く かつては1か月→昨年は10日
- ・ 追試の口頭試問：授業でやった本を持ってくる。原則として教員はやさしい。めちゃくちゃな答えでもなんとか加点できる要素を見つける
- ・ バカロレア取得を決める審査委員会で、微妙に合計点が10点に足りない場合、委員会の権限でポイントを加点できる（通常1点以下）
- ・ 改革によって出題できなくなった問題もある「社会」「歴史」など

- ・ 論理的思考力とフランス語力

高校生のフランス語→ディセプションを書くためにはまったく十分ではない

哲学の問題というよりはそれ以前のフランス語教育の問題？

哲学のプログラムは非常に要求水準が高いのに、実際は...

哲学教育の理想を守っているのはCPGE、グランゼコールの人たちだけではないか

→大学教員もほぼ高等師範学校出身者

バカロレア、CPGE、グランゼコール入試、教員採用試験の問題の連続性：共通点は「問いを立てる」こと

ラテン諸国は中等教育に哲学が存在（ポルトガル、スペイン、イタリア、ルーマニア）

哲学的伝統のあるドイツ語圏に哲学がないのは対照的

4. 将来の展望等

- ・ アグレガシオンに登録中。

博士論文も書きたい。

そうした準備のために現在パートタイムで勤務（給料は半額）

教員の給与はヨーロッパでは低い方。ドイツ、イギリスはフランスの2倍